

猪の鼻

～酒井明 説話集 38※～

山へ山芋堀に行くときに、うり坊をつれて来る人がいる。猪というと「あばれもので手におえん」とだいたいの人はいうが、うり坊の時から育てていると、人にもなれるし愛嬌物じゃ。

秋から冬場にかけて、山の中を散策すると、どんぐり林などを掘りかえした穴に出くわすことがある。谷あいの黒土には、猪の鼻先の跡がべったりと付いていて、すき返して混ぜたようになっていることがある。これは、アカガネや、ミミズを探した混跡じゃ。ポッコリ穴になっているのは山芋を掘った跡で、その穴は1尺5寸から2尺（約45cm～60cm）ほど深く掘ってある。山芋のツルが枯れてしまって、芋の先端も判らなくなっているのにどうして見つけることができるのか、不思議に思う。



春先になると、土の中から竹の子が顔を出す頃、猪は土の布団をかぶった好物の竹の子を、探し当てて食うてしまう。山の兔は、顔を出した竹の子の先っちょだけをかじって食うが、猪は全部キレイにたいらげてしまう。好物のありかを探し出すのは、生まれ持った嗅覚の鋭さにちがいない。動物はそれぞれ、生まれ持った野性の力というものがあるが、猪の嗅ぎつける力と掘る力はすごいものじゃ。

猪に土の中の竹の子を掘りだしてもらい商売にする人がおるが、早く売って高く売ろうとする。猪にとっちゃあありがた迷惑な話で、人間にとっちゃあなかなかうまい話というわけじゃ。子供のうり坊から育てて、そんな手伝いをさせるという人もおるといのが出来ないわけでもなからう。

それにしても、人間に飼われた猪は、いろんな悪い空気を吸って育ち、嗅覚もおとろえるんじゃないかならうか。山の生き物にとっちゃあ、山の空気が一番じゃなからうか。

※) 平成26年3月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会（当時）長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。